

第二十七条 謡に節博士付け様

底本…高知本 対校本…鴻山本

【翻刻】

第二十七 謡にふしはかせつけやう

一、一、一、一、一、一、一、一

イロハニホヘト チリヌルヲワカ

、一、、一、一、一、一、一、一

ヨタレソツネナ ラムウキノオク

一、一、一、一、一、一、一、一

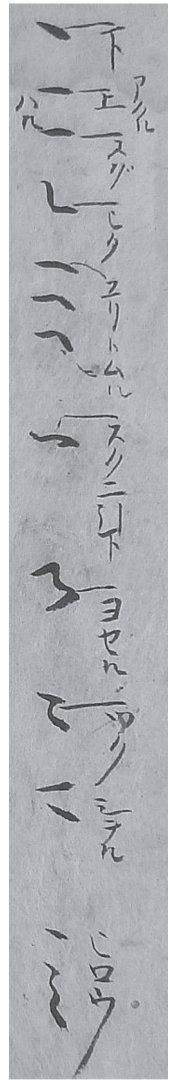
ヤマケフコエテ アサキユメミシ

、一、一、一、一、一、一、一、一

エヒモセス

右其字くのしやう、しぜんに此付やうにあたる事也。是に違ひたる章有と云とも正章にハあらず。そむきたる事也。

下 ①アクル上 スゲ ヒク ユリ トムル スクニ引下 ヨセル ツク ②シヲル ヒロウ



イ ウ ア ウ イ ウ ア イ ウ エラ



ア ジ ラ ウン ケン



③(右此はかせを以て節を知る事なり。ふしをつくと、しやうをさすといふ八ちがひたる事なり。ふしをさすハこれ也。章をさすといふハにごる字すむ字をわくるをいふ事にて御座候。)

【校異】

- ① アクルーアタル(鴻)
- ② シヲル―シホル(鴻)
- ③ 高ナシ。鴻より補う。

【現代語訳】

第二十七 謡への「節博士」の付け方

(いろは歌略)

いろは歌の各文字の章(胡麻)は、アクセントや発音上、おのずからこのような向きになるものである。こことは違った向きがあるとすれば、発音を正しく反映した章ではない。原則に外れたことである。

(博士図略)

右の博士(章としての発音を表す胡麻ではない記号)によつて節というものがわかる。節を付けるというのと章をさすというのは異なった事柄を言うのである。節を書き込むというのは詞章に対して旋律を表す記号である博士を付けることをいう。そもそも一般に章を指すというのは、四声点を付けて濁点により濁る字と澄む字を区別するなど発音に関わる指示をすることをいうのである。

## 【解説】

詞章の横につけられる「節博士」には、章と博士の区別があるとする作者の考えを示す一節である。まず章とは発音やアクセント、あるいは読み方の清濁を明示するものである。冒頭のいろは歌の譜では、高低アクセントを平麻と下げ胡麻によって表している。つぎに旋律を指示する博士があるとし、さまざまな形状の胡麻によりふしが一覽化される。それらは一つないし、いくつかの胡麻が組み合わされてユリなどのきまったりふしを謡う記号である。

謡において歌詞の横に付けられる記号をどう呼ぶかに関しては、現在に至るまで統一的な名称はない。節章句、節章、章句、胡麻、胡麻譜、節譜、節、詞章など多様な呼び方があり、それぞれに少しずつその示すところが異なる。まずこれらのうち、歌詞とふしの両方を表す代表的なものに節章句、節章、章句といった語がある。しかし場合によっては、ふしだけ、歌詞だけを表すこともある（【参考】として挙げた『六徳本』では「章句」はふしを示している）。また、歌詞のみを表す語は詞章である。しかしこれもまた、かつては詞と章、つまり歌詞とふしを表すこともあったという。いっぽう純粹にふしだけを表す語としては、胡麻、胡麻譜があるが、広義には歌詞の横に付けられる胡麻点や注記類の記号全般を示すが、狭義には胡麻点のみを示し、胡麻点に添えられる注記、直しは含まれない。謡のどの側面に焦点を合わせるかによって、また使う人によって、現在にいたるまで名称が入り乱れている。

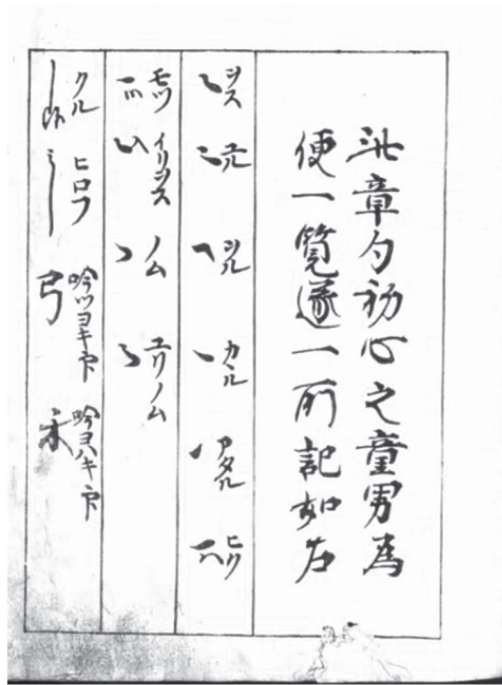
こうした多様な呼称のなかで作者が「節博士」の語で言いたかったのは、ふしを更に細分化し、発音を示す章と、旋律を示す博士というように、謡の譜の機能を、一、詞章の正しい発音を指示する機能と、二、旋律を示す機能の二つに明確に分けて認識していることである。単に音曲としての旋律の面白さだけでなく、語り物として語句の正しい発音を重視している作者の姿勢が読み取れる。

また作者は「博士」として様々な形状の胡麻を列挙しているが、同時代の謡本や謡伝書でも謡の音楽記号を一覧化することはしばしば行われた。【参考】に挙げたように井筒屋六兵衛と西森徳兵衛刊の通称『六徳本』（一六八一）の謡本の冒頭や、『当流拾遺大成謳』（一六九一）の奥付では、基本的な胡麻や直しが一覧化される。『節章句秘伝抄』<sup>2</sup>には、『うたひ鏡』と同様に現在では用いられない複雑な形状の胡麻も数多く示される。江戸時代においても関心が高かったとみられるが、現在でも胡麻の形状とふしの名称の対応関係を示す一覧化は行われており（藤波紫雪『お謡ひ稽古の手引き』檜書店、一九九〇年など）、謡本の音楽記号を読み解く手引きとなっている。

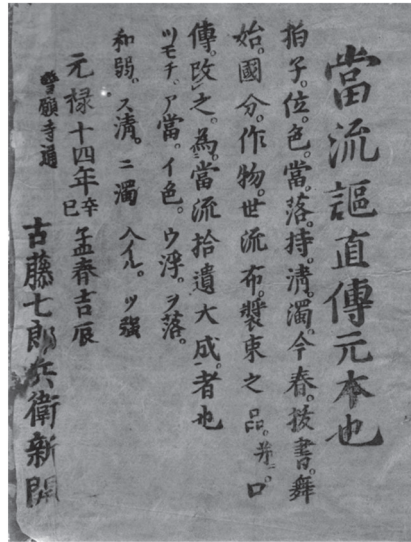
なお最後に作者が冒頭でいろは歌を例に挙げた理由を推測しておく。関西地方での「ケイドロ」という有名な伝承あそびでは、現在でもいろは歌がうたわれる。「いろはにはほへと」は「レドレミドレラ」（相対音高）という旋律で歌われる場合もあり、ここで示された章の音の上げ下げとほぼ一致する。作者の時代のいろは歌と「ケイドロ」のそれとの直接の関連性はもちろん不明であるものの、少なくとも誰もが知るような歌としているは歌が取りあげられ、章の法則を示す具体例となったのかもしれない。

【参考】

◇天和元年通称『六徳本』<sup>③</sup>



◇『当流拾遺大成謳』 図版は元禄十四年古藤版<sup>(4)</sup>



注

- (1) 博士の画像は、研究会にて撮影した画像を使用した。
- (2) 細川十部伝書『節章句秘伝抄』一〇三丁ウ、法政大学鴻山文庫蔵、[https://nohken.wshosei.ac.jp/nohken\\_material/htmls/index/pages/cate3/KZ37\\_17.html](https://nohken.wshosei.ac.jp/nohken_material/htmls/index/pages/cate3/KZ37_17.html) 一〇四頁。
- (3) 上野正章氏所蔵
- (4) 架蔵

(丹羽幸江)

